議会レポート

発行者　鈴鹿市議会議員 石田秀三
鈴鹿市伊船町２７５１　電話 71-0423
FAX 71-2469

2005.3.24.№１２２

タナ上げの水源保護条例

審議会答申から１年以上も進まず

鈴鹿市民の飲み水を将来にわたって守るための「水源保護条例」の制定が、１年以上もストップしている問題について、私は３月１４日の市議会本会議一般質問でただしました。

２００１年９月議会で私は、「水道水を質量ともに守っていくためには、しっかりした水源保護条例を作って、責任と権限を明確にした施策が必要ではないか」と、条例制定を求めました。中尾水道局長は「水道水源に対する施策を内部で検討中」と答弁、条例制定に向けて検討を進めました。そして２００３年５月、条例の原案について審議する「鈴鹿市水道水源流域保全審議会」を、専門家や一般公募の市民もまじえて立ち上げ、５回の審議を経て同年１１月２７日、「鈴鹿市における水道水源の保全について」答申を出しました。そして水道局は「来年の（０４年）３月には条例化」との方針を明らかにしていました。それから１年たっても、動きは何もないままです。

議会への提案時期も明言せず、終始無責任な姿勢

私の質問に対して水道局長は、事業所や市民に対して「大変きびしい規制になるので、各方面との協議が必要」なので遅れていると弁明しました。しかし、市民生活や営業活動への影響について、規制すればどうなるかも審議会で議論して結論を出したのではないか、との私の指摘には、「審議会答申はタナ上げするつもりはない、尊重します」と答えるのみで、「具体的に、いつまでに条例として議会に提案できるのか」との質問には、時期の明言は避ける態度に終始しました。

市の重要施策のためにわざわざ審議会を作っておいて、その結論である答申を市自身が理由もなくタナ上げするという事態は、きわめて異常です。

どうするの？食堂のない新庁舎

市役所の新庁舎建設工事が順調に進んでいます。４月２３日には市民対象の現場見学会が行なわれます。見学会への参加は、申し込みが必要です。４月５日までにはがきかメールで庁舎建設室までに申し込んでください。

８百人の職員と、来庁者の昼食はどこで取るのか

さて、立派な庁舎が完成しても、いろいろな問題が予想されます。私は昨年９月議会で「立体駐車場」の出入口が１ヶ所しかなく、前の道路が大渋滞するのではないか、と問題提起し、再検討を求めましたが、今回の３月議会では「食堂がない」問題を取り上げました。

この問題は、新庁舎の構想を議論していた前期の２０００年から指摘してきた問題でもあります。当時の「庁舎建設推進特別委員会」で、新庁舎の基本設計案を見て、私が「どこにも食堂がないではないか」と指摘し、当時の担当者は「新庁舎に入れないが、西庁舎で検討する」と答えて、規模は３６０㎡、１２０席としたのですが、この話はその後ウヤムヤにされて、どこにも食堂のたぐいは作らないことになっています。

いよいよ庁舎完成を前にしてどうするのかとの私の質問に対して、市当局は「面積の制約、予算の制約」というこれまでの理由に加えて、「周辺業者との競合、地域経済への貢献」というのを出してきました。しかし、以前にあった「たなべ」などの食堂は撤退して、いま周辺には数軒しかありません。競合どころか「絶対的不足」状態です。職員はみんな弁当持参か、業者弁当を取るぐらいしか対処方法がなく、不便さは目に見えています。

何百人もの人間を集めて働かせるのに、昼ごはんの用意さえ考えないというのは、労務管理のイロハが分かっていないということです。今からでも考え直すべきです。

１５階展望ロビーを、市民のための場所に

また私は、１５階に設定される展望ロビーを、執務時間中だけでなく、夜間や土日などにも市民に開放し、新しい鈴鹿の名所、山から海まで見渡せる市民のためのスポットにと提案しました。市当局はオープンからしばらくの間しか考えていないとの答えですが、もっと積極的に開放すべきです。

神戸中・平田野中新築を、なんで「ＰＦＩ」にする必要があるのか？

新年度予算で、早い改築が望まれている神戸と平田野の２中学の移転新築事業を、「ＰＦＩ」にする検討のための費用が１２００万円計上されています。「ＰＦＩ］とは聞き慣れない言葉ですが、例えば市で文化施設やレジャー施設を作る場合に、民間の経営手法で営業利益を上げて必要経費を減らす、つまり役所が経営するより民間資本に任せたほうがうまくいくと考えて、施設の建設から運営までを１業者に委ねる手法です。

しかし、今回の学校建設は、なにも営業利益の出るような業種でもありませんし、やってくる生徒も働く先生も、民間手法でどうなるものでもありません。唯一の目的である建設工事を安くしようと思えば、設計や入札で工夫し、安く仕事をしてくれる業者にさせれば良いことです。ＰＦＩにする必要性など何もありません。そんな調査のために、コンサルタントに１２００万円も払うのは、ムダ使いでしかありません。

それよりも、少人数授業のための先生をふやして

この予算書の同じページに、少人数授業のための非常勤講師２０人を雇う費用が１９４４万円計上されていますが、昨年度３０人が２０人に減らされるのです。私は「こんなムダな調査に１２００万円も出す予算を、先生を昨年並みに雇う費用に回すほうが、よっぽど子どものためになる」と主張しました。

今どきなぜ、「東京事務所」なのか？？

川岸市長は新年度予算の中で、「東京事務所の設置」のための調査費を計上しました。「情報の収集と発信」が大切だとの説明ですが、これには議員の中から「インターネットの時代に何を言っているのか」「東京事務所を撤退させる自治体が出ているような時に、新設とはどういうつもりか」との声が続出しました。１人や２人の職員を大金を使って東京に常駐させて、どんなメリットがあるのか、説得力のある説明は何も聞かれません。

［訂正］ 前号の記事中、「脳ドック」の自己負担金を８０００円としたのは間違いでした。実際はもっと高くまた病院ごとにバラツキがあるとのことです。

ずいそう

渥美清の「泣いてたまるか」

あのなつかしい渥美清に、また会える。そんなうれしい企画が３月からスタートした。「渥美清の泣いてたまるか・ＤＶＤコレクション」全２７巻が、月２回のペースで発行、書店で販売されることになったのである。各巻に２話、合計５４話の５０分ドラマが収録されていて、これから１年２ヶ月の間、毎週見たいテレビ番組ができたようなものである。しかもＤＶＤだから、見逃すことがないし、何度でも見られるのもうれしい。

こんな良質ドラマが、なぜ今は作られないのか

「泣いてたまるか」は、昭和４１年から４３年にわたって日曜夜８時に放送され、渥美清が毎回かわった役柄で主人公を演じていた。映画「寅さん」シリーズ４８作が、ずうっと同一人物を演じていたのとは対照的である。しかし若くていちばん脂ののっていた時期の渥美清だから、寅さんよりも魅力的でさえある。当時中学生だった私が、同じ時間帯だった人気ドラマ「青春とはなんだ」よりもこのドラマを鮮明に覚えているほどだから、よほど面白かったのだろう。

このシリーズの案内を見ると、脚本が野村芳太郎、橋田寿賀子、早坂暁、山田太一、木下恵介、山田洋次、監督も今井正、佐藤純彌、深作欣二、家城巳代治、さらに共演者は加藤剛、藤山寛美、西村晃、栗原小巻，中村玉緒、左幸子、宮本信子などなど、当時のそうそうたるメンバーが一度は顔を出している。映画も全盛期だったが、しっかりしたテレビドラマを作ろうという当時のスタッフの意気込みが画面に表われている。

最近のテレビは、本当に見たいものがない。というより、見たくないものが多すぎる。同じような顔ぶれの、芸のない芸能人がくだらない話題でバカ騒ぎしている、あんなものに付き合うのもバカバカしい。ドラマもいい加減な作りのものが堂々と映されていて、うんざりする。

ＮＨＫの制作費使い込み、政治的偏向、フジテレビをめぐるマネーゲームなどが、毎日のように話題になるが、こんないい番組ができたというような話題にはめったにお目にかからない。心から感動し、楽しもうとするには、過去のＤＶＤを見るしかないという状態は、実はさみしいものである。